

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成20年10月26日

財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 灵長類研究所
職名・学年 助教
氏名 江木直子

| | | |
|-------|--|--------------------------|
| 事業区分 | 平成20年度・国際研究集会派遣助成 | |
| 研究集会名 | 第68回古脊椎動物学会 (Society of Vertebrate Paleontology 68th Annual Meeting) | |
| 発表題目 | ポンダウン(ミャンマー)およびクラビ(タイ)動物相の食肉類:中期～後期始新世東南アジアにおける系統的多様性の変化 (Carnivorans from the Pondaung (Myanmar) and Krabi (Thailand) faunas: change of taxonomic diversity in the middle to late Eocene of Southeast Asia) | |
| 開催場所 | アメリカ合衆国オハイオ州クリーヴランド市 ルネッサンス・クリーヴランド・ホテル | |
| 渡航期間 | 平成20年10月14日～平成20年10月20日 | |
| 成果の概要 | タイトルは「成果の概要 / 報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有() | |
| 会計報告 | 交付を受けた助成金額 | 200,000 円 |
| | 使用した助成金額 | 200,000 円 |
| | 返納すべき助成金額 | 0 円 |
| | 助成金の使途内訳 (使用旅費の内容) | 国際航空運賃 156,550 円 |
| | | 宿泊費 43,238 円 (USD419.63) |
| | | 参加費 31,697 円 (USD290.00) |
| | | 上記金額に助成金を充当 |
| | | |
| | | |

京都大学教育研究振興財団助成事業
平成 20 年度・国際研究集会派遣助成
成果の概要

平成 20 年 10 月 26 日

報告者：江木直子（京都大学靈長類研究所，助教）

平成 20 年 10 月 15 日から 18 日の 4 日間にわたってアメリカ合衆国オハイオ州クリーヴランド市で行われた第 68 回古脊椎動物学会 (Society of Vertebrate Paleontology 68th Annual Meeting) に出席し、研究成果発表を行ったので、その概要を報告いたします。

1. 発表内容（和訳）

題名：ポンダウン(ミャンマー)およびクラビ(タイ)動物相の食肉類: 中期～後期始新世東南アジアにおける系統的多様性の変化

発表者：江木直子(京都大学靈長類研究所), 鐸本武久(林原生化学研究所・古生物博物館), 仲谷英夫(鹿児島大学理学部), 國松豊(京都大学靈長類研究所), 高井正成(京都大学靈長類研究所)

要旨：ミャンマーとタイにおける始新世堆積層の古生物学的発掘調査によって、幾つかの食肉目(哺乳類)標本が発見された。これらの大部分が未記載種である。ミャンマー中部の中前期始新世末ポンダウン(Pondaung)化石哺乳動物相からは、ニムラヴス科 2 種, ミアキス科 2 種, アンフィキオン科 2 種を含む, 3 科 6 種の食肉類が見つかった。タイ南部の後期始新世クラビ(Krabi)化石哺乳動物相には、5 科 6 種が存在するとされていた。新標本を観察したところ、科不明のイヌ型亜目とされていた動物は始新世～漸新世ユーラシアから知られる *Cephalogale* のような基底的なクマ下目であり、また科不明のクマ上科とされていた標本も同一種に属す可能性があることが明らかになった。したがって、クラビ化石哺乳類相に存在する食肉類は、ニムラヴス科 2 種, ミアキス科 1 種, クマ下目 1 種, イタチ科 1 種の 4 科 5 種になる。更にこれらの化石哺乳動物相を中国南部に分布する下部・上部路美邑(Lower and Upper Lumeiyi), 洞均(Donjun), 那謙(Naduo), 公康(Gonkang)の中期～後期始新世の哺乳類相と比べたところ、ニムラヴス科, ミアキス科, アンフィキオン科と *Cephalogale* はこれら中国南部からも産出例があった。ポンダウン相とクラビ相の哺乳類は固有性が高いことが知られているが、食肉類ではイタチ科を例外として、固有性は支持されなかった。ニムラヴス科は古い動物相から新しい相まで見つかり、もっとも普遍的に存在する食肉類である。他の食肉類はこの地域の哺乳動物相に、中前期始新世末か後期始新世に現れ、食肉類の種多様性を増加させた。中前期始新世の哺乳動物相は、哺乳類捕食者の半分以上が肉歯目やメソニクス科といった食肉目以外のもので占められている点で、後期始新世の哺乳動物相とは異なる。これらの比較から、東アジア南部では、中前期始新世末に食肉類そして肉食哺乳類の種多様性が増加し、後期始新世には食肉類による肉歯類の置換が起こったことを示唆した。

2. 発表成果

今回の発表はポスター形式で行った。ポスター発表では 2 時間の質疑応答担当時間があり、これは他の学会に比べるとやや長いのだが、この間に様々な研究者が本研究に立ち寄った。ミャンマーやタイの化石発掘調査については京都大学を中心とした日本の調査隊以外にも、フランス・アメリカなどの調査隊が研究をおこなっており、これらの競合する研究者と直接会い、意見交換を行えたのは有意義なことであった。また、立ち寄った研究者の中には、古第三紀(65 ~ 24 百万年前)東アジア産哺乳類化石を扱っている研究者や、日本国内には専門家がない食肉類の絶滅科を扱ってきた研究者も含まれ、本研究と関連した事象に興味を持つ研究者へ宣伝することができたと考えられる。

3. 集会に係る所見

古脊椎動物学会(Society of Vertebrate Paleontology)は、アメリカ合衆国とカナダを中心とした、この分野における最大の学会である。この研究分野で国際学会がないため、北米以外に居住する研究者も多く参加し、実質的な国際学会となっており、またこの研究分野での最新情報が発表される。

今回は、アメリカ合衆国オハイオ州クリーヴランド市で行われ、口頭319件、ポスター310件の発表があり、参加者は1000人を越えた。この学会へは今回が11回目の参加となるが、年々大規模化の一途をたどっている。口頭発表は3~4セッションが平行して行われ、ポスターセッションは日替わりで計4セッションが行われた。大規模な割にはプログラムが良く組まれていて、平行して行われるセッションへの聴衆に重複が起こることが少なく、多くの発表を落ち着いて聴くことができた。